「士」と「土」の書き分けについて

県立塩沢商工高等学校教諭　丸山　力

はじめに

士は二本の横画の上を長く書き、土は二本の横画の下を長く書く。そう書かなければ誤字（×）となる。常用漢字の中には（以下、常用漢字の範囲内で考察する）、吉や喜、基や寺のように印刷文字の字形では、「士」「土」の形を部分として持つ漢字が多数ある。その「士」「土」は印刷文字の字形のとおりに書き分けないと誤字になるのだろうか。

国語の教員は、日常的に小テストや定期テストで漢字の書き取りを出題し、採点している。その時、「士」と「土」の書き分けを、どういう基準で採点しているのだろう。印刷文字の字形のとおりに書き分けないと×という基準で、採点しているのだろうか。だとしたら、その基準は、はたして正しいといえるのか。寺を**寺**と、寸の上の「土」を「士」のように書くのは、ごく一般的な書き方である。教員自身そう書いたりはしないのか。牛丼の吉野屋の吉は、口の上が「士」でなく「土」である。**吉**と書いたら×なのか。

常用漢字表に示された字体が、現在の日本の正字であり、それをそのままに受け入れなければならないとしても、どこまで厳密にその字形のとおりに書かなければならないのか。この小論で、「士」と「土」について考えてみたい。

以下に示した解字は、主に『新漢語林　第二版』（大修館書店）で調べ、『広漢和辞典』（大修館書店）でそれを補った。また傍線部は白川静『字統』（平凡社）、波線部は加藤常賢『漢字の起原』（角川書店）に示された解字である。

「士」の形が内にある常用漢字（二三字）

士

士は金文でわかるように、ある種のまさかりの象形で、まさかりを持つような男性の意味を表す。

仕

仕は人＋士（音符）の形声文字。

吉・志・壮・売・声・壱・喜

吉は士＋口の会意文字。士は、甲骨文・金文では、おの（斧）などの刃物の象形。口は、めでたいことを祈ることばの意味。のりとの上に、その内容を確保するための刃物を、まじないとして置くさまから、めでたいの意味を表す。　志は心＋士〔屮（シ）〕（音符）の形声文字。屮（之）は、ゆくの意味。心のゆき向かうこと、こころざすの意味を表す。屮は、止＋一の指事文字。止はあしの意。一は出発線を示す。出発線からいまにも一歩をふみだしいこうとすることを示す。　壮は壯の新字体。壯は士＋爿（ショウ）（音符）の形声文字。爿は、ながいの意味。背たけの高い男の意味を表し、転じて、さかんの意味を表す。　売は賣の新字体。篆文は、出＋買（音符）の形声文字。買は、あきなうの意味。買が、かうの意味に用いられたため、区別して、出を付し、うるの意味を表す。　声は聲の新字体。篆文は、耳＋殸（ケイ）（音符）

の形声文字。殸は、中国の古代の楽器で、高い音のする、けいの意味。耳に達する高い音・こえの意味を表す。常用漢字の声は、省略体としての俗字による。　**壱**は壹の新字体。篆文は、壺＋吉（音符）の形声文字。吉は、めでたさをたもつの意味。壺は、つぼの意味。つぼを密閉して酒を発酵させるさまから、事が成功するように力を保ち、力をこらす・もっぱらにするの意味を表す。壺は蓋つきのつぼの象形。常用漢字の壱は俗字による。　**喜**は壴＋口の会意文字。壴は、掛けた打楽器の象形。口は、祈りのことばの意味。楽器を打ち神に祈り、神を楽しませる意味から、よろこぶの意味を表す。

この漢字の中で吉と壮の「士」の部分だけが字源的に士である。吉は今でも**吉**と書かれるし、壮も歴史的には**壯**とも書かれてきた。[1] 志の「士」の部分は、字源的には寺の「土」の部分と同じ。志は今でも**志**と書かれることがある。

誌・結・詰・荘・装・続・読・鼓・膨・殻・穀・款・隷・樹

誌は言＋志（音符）の形声文字。　**結**は糸＋吉（音符）の形声文字。吉は、緊に通じ、しっかりしめるの意味。糸をしっかりむすびあわせるの意味を表す。　**詰**は言＋吉（音符）の形声文字。　**荘**は艹＋壯（音符）の形声文字。壯は、さかんの意味。草の生長がさかんであるの意味を表す。　**装**は衣＋壯（音符）の形声文字。壯は、倉に通じ、しまう・かくすの意味。衣服で身をつつむ・よそおうの意味を表す。　**続**は續の新字体。續は糸＋賣（音符）の形声文字。賣は、属に通じ、つづくの意味。糸がつづくさまから、つぐ・つづくの意味を表す。賣は金文は、貝＋直の会意文字。直は、直視するの意。あい手を直視し、目をくらませ迷わせて品物をうりつける、または、買いとるの意。歩きながら品物をほめて売るの意を表す。篆文はその変形による。　**読**は讀の新字体。讀は言＋賣（音符）の形声文字。

鼓は壴＋支の会意文字。壴は、つづみ・たいこの象形。支は、手にばちを持ってうつさま。　**膨**は肉＋彭（音符）の形声文字。彭は、つづみの音の形容で、ふくれるの意味。彭は壴＋彡の会意文字。

殻は篆文は、殳＋肯（音符）の形声文字。肯は、中がからになっている物の象形。殳は、たたくの意味。たたいて実をとりだした、からの意味を表す。　**穀**は禾＋殼（音符）の形声文字。殼（殻の本字）は中味のない外皮、からの意味。からをかぶったもみ、穀物の意味を表す。　**款**は欠＋柰（音符）の形声文字。欠は、大きな口をあけた人の象形。柰は祟とも奈とも。祟は、たたりの意味。奈は、紅色のりんごの意味。人が何かの対象（祟・奈）に対して、開放的に大きな口をあけ、しかも、かざりけがないさまから、よろこぶ・まこと・親しむの意味を表し、声を出しながら門をたたくの意味を表す。また、鐘鼎などに口をあける、きざむの意味や刻まれた法律文の条項の意味も表す。この字には意味の多様と字形の不明が原因して定説がない。また款は柰と欠とに従う会意文字。柰は祟の簡体。祟は呪能をもつ獣の形で、希がその象形。（白川）　**隷**は隶＋奈の会意文字。隶は、とらえるの意味。奈は、古文では祟であるが、その意味はわからない。罪人や異民族をとらえて、しもべとする・したがわせるの意味を表す。また隷は祟と巾と手とに従う会意文字。のちの字形は、それより変化したものである。祟の初形は希、祟をなす呪霊をもつ獣の形。（白川）　**樹**は木＋尌（音符）の形声文字。音符

の封は、樹の原字で、甲骨文では、木＋寸＋豆（音符）。寸は、手の象形。音符の豆は、安定して立つたかつきの象形。樹木や農作物を手で立てて安定させる、うえる・たてるの意味を表す。

この漢字の中で結・詰・荘・装の「士」の部分だけが、字源的には士である。

以上のことから「士」の形が内にある常用漢字二三字の中で、字源的にその「士」が士であるのは、士・仕・吉・結・詰・壮・荘・装の八字である。その八字の中で、「士」の部分を明確に上の横画を長く、下の横画を短く書かなければならない字は、士と仕の二字だけであると私は考える。（仕は「士」の部分が音符の形声文字で、仕をシと読むことから。）吉と壮の「士」は字源的には士であっても、吉・壮と書かれることは前記した。当然それは吉・壮を部分として持つ結・詰・荘・装にも当てはまる。その他の漢字は字源からみて、どうしても「士」と上の横画を長く書かなければならないとは考えられない。原田種成は『漢字小百科辞典』（三省堂）の中で、「『天・吉・志・喜・舞・親・封』など、上の横棒を長く書くか短く書くかは好みであり、自由であり誤りではない」と述べている。(2)

「土」の形が内にある常用漢字（一一八字）

土

土は象形文字で、甲骨文でよくわかるように、土地の神を祭るために柱状に固めた土の形にかたどり、土の意味を表す。

土が字の右部（旁の位置）にある漢字

吐・社

吐は口＋土（音符）の形声文字。社は示＋土（音符）の形声文字。土は、農民が共同で祭る農耕地の神の意味。土が、つちの意味に用いられるようになり、示を付して、区別した。

土が字の下部（脚の位置）にある漢字1

基・型・堅・墾・塞・塾・塑・堕・墜・塗・堂・壁・墓・墨・塁

基から塁までの十五字は、全て土＋■（音符）の形声文字。

土が字の下部（脚の位置）にある漢字2

至

至は矢が地面につきささったさまから、いたるの意味を示す指事文字。また矢の倒形と一とに従う。一は矢の到達点。そこに矢の至ることをいう。（白川）

至の「土」は、字源的には土ではない。至の部首は土ではなく至である。

土が字の下部（ほぼ脚の位置）にある漢字

室・窒・茎

室は宀＋至（音符）の形声文字。窒は穴＋至（音符）の形声文字。茎は莖の新字体。莖は艹＋巠（ケイ）（音符）の形声文字。巠は、はたおりのたていとの象形で、まっすぐで強いの意味。また巠はたて糸を張った形。下部の工の形は、経糸の一端を巻きつける横木で的杠（てきこう）といわ

れる部分であろう。（白川）

室・窒の「土」も、茎の「土」も字源的に土ではない。

土が字の中央にある漢字

圧・在

圧は壓の新字体。壓は土＋厭（音符）の形声文字。在は士（シ）＋才（音符）の形声文字。才は、川のはんらんをせきとめるための良質の木の象形。士は、まさかりの象形。ともに災害から人を守って、存在させるものの意味から、あるの意味を表す。篆文は、士が土に変形した。圧は壓の新字体なので、圧の「土」は字源的には土ということになるが、在の「土」は字源的には士である。

土が字の右下の位置にある漢字（佳・涯・崖は土が二つある）

煙・経・径・軽・怪・陛・陸・睦・挫・座・粧・佳・涯・崖・屋・握

煙は火＋堊（イン）（音符）の形声文字。堊は、かまどから出るけむりの象形。経は經の新字体。經は糸＋巠（音符）の形声文字。径は徑の新字体。徑は彳＋巠（音符）の形声文字。軽は輕の新字体。輕は車＋巠（音符）の形声文字。怪は忄＋土＋又（音符）の形声文字。土は、土地の神の象形。又は、右手の象形。触れてはいけない土地の神の上に右手を置き、異常な心理状態となる、あやしむの意味を表す。陛は阝＋坒（ヒ）（音符）の形声文字。坒は土＋比（音符）の形声文字。比は、ならぶ意。土地がつらなっている意を表す。陸は阝＋坴（リク）（音符）の形声文字。坴はつらなるきのこの意味を表す。連なり生えるきのこのような、高地・おかの意味を表す。また坴は神を迎える幕舎の形。神梯の前にその幕舎を設け、高平の地で神を向かえ祀ることを示す字。（白川）睦は目＋坴（音符）の形声文字。挫は扌＋坐（音符）の形声文字。坐は土＋人＋人の会意文字。向きあう二人が土にひざをつけてすわるさまから、すわるの意味を表す。座は广＋坐（音符）の形声文字。粧は米＋庄（音符）の形声文字。庄は广＋壯（音符）の形声文字。壯（壮）は士（シ）＋爿（音符）の形声文字。佳は人＋圭（ケイ）（音符）の形声文字。圭は縦横の線を重ねて、幾何学的な製図のさまにかたどり、上が円錐形、下が方形の玉の意味を表す象形文字。涯は氵＋厓（音符）の形声文字。厓は厂＋圭（音符）の形声文字。崖は山＋厓（音符）の形声文字。屋は尸＋至の会意文字。握は扌＋屋の形声文字。

この漢字の中で「土」の部分が字源的に見て確実に土であると考えられるのは、怪・陛と挫・座だけである。粧の「土」は字源的には士である。佳は歴史的には**佳**と書かれることが多かった。

土が字の左下の位置にある漢字（封は土が二つある）

致・到・毀・封

致は夂（スイ）＋至（音符）の形声文字。夂は、下向きの足の象形で、ひきかえすの意味。おくりとどけるの意味を表す。常用字の致は夂を攵に書き誤った俗字による。到は至＋刂（音符）の形声文字。毀は土＋毀省（キ）（音符）の形声文字。毀は、うすで米をつくの意味。土をつきつぶすさまから、こわすの意味を表す。封は土＋寸＋丰（フウ）（音符）の形声文字。丰（左上の「土」）は、草が密生するさまから、

寄り集まるの意味。土を寄せ集めて盛るさまから、盛り土の意味を表す。また、盛り土をして境界を作り、領土を与えて諸侯とするの意味をも表す。

この漢字の中の「土」の部分が字源的に見て土であると考えられるのは、毀と封の左下の「土」である。封の左上の「土」は土ではない。

土が字の中央の下部にある漢字（街・掛は土が二つある）

倒・緻・街・掛

倒はイ＋到（音符）の形声文字。**緻**は糸＋致（音符）の形声文字。**街**は行＋圭（音符）の形声文字。**掛**は扌＋卦（音符）の形声文字。卦は卜＋圭（音符）の形声文字。

この漢字の中の「土」の部分は、字源的にはどれも土ではない。

土が字の中心にある漢字

周・舎

周は指事文字。甲骨文・金文は、方形の箱または鐘などの器物に彫刻がいちめんに施されているさまから、あまねくゆきわたるの意味を表す。金文・篆文で口が付くのは、気持ちをゆきとどかせて祈るさまを示す。また周は囲（なし）と口とに従う。囲は方形の盾に文様のある形、口は㠯（さい）、祝禱を収める器の形。（白川）　**舎**は舍の新字体。舍は口＋余（音符）の形声文字。心身をのびやかにして、やどるの意味を表す。口は、ある場所を示す。余は象形で、甲骨文、金文とも、先の鋭い除草具の象形で、自由にのびるの意味を表す。また舎は把手のある針器と口とに従う。口は㠯で祝禱を収める器。その器の上から、長い針器でこれを突き刺す形。これによって祝禱の呪能はやぶられ、その呪能を失うので、捨てる意となる。すなわち舎は捨の初文。いまの常用漢字は、針先を切って器に達せしめないのであるから、字の構造的な意味は失われている。（白川）また舎は口＋余（音符）の形声文字。余は竚立した傘のごとき形の安徐する亭屋である。（加藤）

周・舎が内にある漢字

週・彫・調・捨・舗

週は辶＋周（音符）の形声文字。**彫**は彡＋周（音符）の形声文字。**調**は言＋周（音符）の形声文字。**捨**は扌＋舎（音符）の形声文字。**舗**は篆文は、金＋甫（音符）の形声文字。金を改めて舎とし、常用漢字ではこの舗を用いる。

この漢字の中の「土」の部分は、どれも字源的には土ではない。

土が字の上部にある漢字

猿・去・幸・傲・寺・赤・走・達・陵・勢

猿は犭＋袁（音符）の形声文字。袁は土（止）＋口＋衣省の会意文字。止は、足あとの象形で、あるく意味。今、土に変形した。口は、ある玉の象形。衣服の中に玉を入れ、旅だちの安全をいのるさまから、とおざかるの意味を表す。　**去**は大＋ム（シ）の会意文字。大は、ひとの象形。ムの部分は、甲骨文では、口で、いのりのことばの意味。祈って人についたけがれを除去する、さるの意味を表す。**幸**は手かせの

象形。さいわいにも手かせをはめられるのをまぬかれて、しあわせの意味を表す。 **傲**は人＋敖（音符）の形声文字。敖は出＋放の会意文字。出は、でるの意味。放は、ときはなすの意味。自由に出遊ぶの意味を表す。転じて、おごるの意味に用いる。 **寺**は寸＋屮（音符）の形声文字。寸は、手の象形。屮は、止に通じ、とどまるの意味。法を持して役人が駐在するところ、役所の意味を表す。仏教伝来以後、てらの意味を表す。 **赤**は大＋火の会意文字。大は、人の象形。火の光を浴びる人のさまで、あかいの意味を表す。 **走**は夭＋止の会意文字。夭は、はしる人の姿の象形。止はあしの意味。 **達**は辶＋奎（音符）の形声文字。奎は羊＋大（音符）の形声文字。奎は、のびやかにはねまわる小羊の意味。のびやかにすすむの意味。また達は辶＋奎（音符）の形声文字。奎は大きな母羊の後ろから、小羊が生まれ落ちる形。大はこの字においては、母羊を後ろからみた形である。（白川） **陵**は阝（自）＋夌（音符）の形声文字。夌は高い地をこえるの意味。越えていかなければならない、おかの意味を表す。甲骨文は、自（おか）＋夊（足をあげる人）＋夊（あしあと）で、人がおかにのぼるの意味を表す。また夌は㚔と夊とに従う会意文字。㚔は聖地に神を迎える建物の形。これに夊（足）を加えるのは、陵越・凌辱の意である。（白川） **勢**は力＋埶（音符）の形声文字。埶は、甲骨文・金文でよくわかるように、人が若木を持つ形にかたどり、うえるの意味を表す。金文の一種には、若木が木・土となるものがあり、のち、篆文では、圭に変形した。

袁・去・幸・寺・赤・走・埶が内にある漢字

園・遠・蓋・却・脚・法・執・摯・報・詩・侍・持・時・待・等・特・嚇・赦・越・起・趣・超・赴・徒・熱

園は囗＋袁（音符）の形声文字。 **遠**は辶＋袁（音符）の形声文字。 **蓋**は艹＋盍（音符）の形声文字。盍は、おおうの意味。草を編んで作った、おおいの意味を表す。盍は象形。物をのせた皿にふたをした形。 **却**は卩＋去（音符）の形声文字。 **脚**は月〔肉〕＋却（音符）の形声文字。 **法**は、金文は水＋廌＋去の会意文字。廌は古代の裁判に用いた神獣の意味。裁判にやぶれてけがれた廌を皮袋に入れて水に投じ去るさまから、おきての意味を表す。法は灋の省略体。 **執**は甲骨文・金文でわかるように、手かせ（幸）に手をとらえられてひざまずく人の象形。 **摯**は手＋執（音符）の形声文字。 **報**は幸＋𠬝の会意文字。 **詩**は言＋寺（音符）の形声文字。 **侍**は人＋寺（音符）の形声文字。 **持**は扌＋寺（音符）の形声文字。 **時**は日＋寺（音符）の形声文字。 **待**は彳＋寺（音符）の形声文字。 **等**は竹＋寺（音符）の形声文字。 **特**は牛＋寺（音符）の形声文字。 **嚇**は口＋赫（音符）の形声文字。赫は赤＋赤の会意文字。 **赦**は攵＋赤（音符）の形声文字。 **越**は走＋戉（音符）の形声文字。 **起**は走＋己（音符）の形声文字。 **趣**は走＋取（音符）の形声文字。 **超**は走＋召（音符）の形声文字。 **赴**は走＋卜（音符）の形声文字。 **徒**は『説文解字』は赴で、辵＋土（音符）の形声文字。土はつちの意味。道を行くとき乗物に乗らず土をふんで歩くの意味を表す。また初形は辻に作り、辶＋土（音符）の形声文字。土は社の意で、もとその社に属するものを徒と称したのであろう。徒は俗字とされて

いるが、金文にまたその字形に作るものがある。（白川）熱は灬＋埶（音符）の形声文字。埶は藝の異体字で、然に通じ、火でやくの意味。火を付し、あついの意味を表す。また埶（げい）と火とに従う会意文字。埶は『説文解字』に「種（う）うるなり」とあって、種芸のことを示す字。植木の繁茂には温熱のときがよろしく、熱とは自然の温暖なる気候をいう。（白川）

徒は初形とは異なる字体であるし、他の漢字の中の「土」の部分は、どれも字源的には土ではない。寺の「土」の部分は、志の「士」の部分と字源的には同じものである。寺を**寺**と書くのは現在ごく一般的である。

土が字の左部（偏の位置）にある漢字

域・塩・塊・壊・堪・境・均・坑・埼・城・場・壌・増・堆・壇・地・塚・坪・堤・墳・塔・培・坂・墳・塀・坊・堀・埋

塩は鹽の新字体。鹽は鹵＋監（音符）の形声文字。常用漢字の塩は俗字による。他の漢字は全て土＋■（音符）の形声文字。

以上、常用漢字の一一八字。

その他

垂・里・暁

垂は土＋乖（スイ）（音符）の形声文字。乖は、草木の花や葉の長くたれさがる形にかたどる。　里は田＋土の会意文字。田は、整理された生産地の象形。土は、土地神をまつるほこらの象形。田地・土地神のほこらのある、さとの意味を表す。　暁は曉の新字体。曉は日＋堯（音符）の形声文字。堯は垚（ギョウ）＋兀（ゴツ）の会意文字。垚は土を高く盛るの意味。兀は高くて上が平らの意味。垚は土を三つ重ねて、高い意を表す会意文字。

垂と里は土と他の部分が一体化して、単独での土の形は明確ではない。また垂は現在中国で最も規範的な字典とされる『新華字典』では「垂」という字形（四本の横画のうち、一番長いのは上から二番目の横画、次が一番上、次が三番目、一番下の横画が一番短い）になっている。日本の垂の字形は、一番長いのが上から二番目の横画、次が一番下、次が一番上、上から三番目の横画が一番短いのが一般的である。暁では三つの土が一体化して、土の形は明確ではない。

以上のことから、「土」の形が内にある常用漢字一一八字の中で、「土」の部分を明確に上の横画を短く、下の横画を長く書かなければならない字は、土と吐・社、それと「土」が漢字の下部（脚の位置）にあって独立した形を有し、土＋■（音符）の形声文字である基・型・堅・墾・塞・塾・塑・堕・墜・塗・堂・壁・墓・墨・塁の十五字。（「土」が脚の位置にあると「土」の形が明確になることから。）合計で十八字と私は考える。土＋■（音符）の形声文字でも、「土」が漢字の左部（偏の位置）にある字は、下の横画を左下から右上に払う形（圭）であるので、横画の長短にこだわらなくてもよい。

圧の「土」は字源的には土であっても字体が変わり、土＋厂（音符）の形声文字とはいえないし、圧と字形の似ている在の「土」が字源的には士で、下の横画を必ず長く書かなければならないとはいえないので、

圧・在を**圧**・**在**のように書いてもよい。

その他の「土」の形が内にある常用漢字の中にも、怪・陛・挫・座・毀・封（左下の「土」）の六字のように、「土」が字源的には土である字があるにはあるが、字源的には土でない字の方が圧倒的に多数であり、六字の「土」だけ下の横画を長く書くことにこだわる必要はない。

おわりに

私は学生時代に天を**天**と上の横画を短く書いたためにレポートの再提出を命じられたことがある。当時の私はそう書いても全く問題のないことを知らなかったので、書き直して提出した。このように印刷文字[3]の字形の細部にこだわって、その通りに書かなければ×などと教えてる教員が多数いる。そういう間違った漢字教育をやめさせるには、これとこの漢字だけは横画の長短を明確に書き分けなければならないが、それ以外の漢字は横画の長短を漢字の正誤を判断する基準にしてはならないと、教員に明確な基準を示すしかない。

前書きに「明朝体のうちの一種を例に用いて『印刷文字における現代の通用字体』を示した」とあるように、常用漢字表に示されているのは印刷文字の字体である。印刷文字と筆写（手書き）の文字の違いについては、前書き・(付)字体についての解説・第2明朝体と筆写の楷書との関係について にいくつか具体例が示されているが、到底それだけでは筆写の漢字の正誤を判断する明確な基準にはなりえない。

昭和二十四年に当用漢字字体表が告示される。当用漢字字体表に示された字体は常用漢字表にそのまま受け継がれ、六十年以上経過した現在、正字として完全に定着した。（昭和五十六年に告示された常用漢字表では九十五字追加されたが、当用漢字字体表で示された字体が改められたのは一字で、燈が灯となっただけである。）ようやく日本に初めて正字は定まったが、明確な正誤の基準がないというのが、現状である。そのような明確な基準のない状況で、漢字の知識をはかる漢字検定の方が先に社会に定着し、漢字教育の混乱に拍車を掛けている。今こそ、明確な基準を定めなければならない。私はその明確な基準を作る一つの試みとしてこれを書いた。

尚、この小論は全国漢文教育学会編集『新しい漢字漢文教育』第五十七号（平成二十五年十一月発行　研文社）に掲載された拙論「漢字の正誤を判断する観点」を書くために作成した資料に手を加えたものである。基準の全体像については、「漢字の正誤を判断する観点」、および平成二十六年十一月に発行される『新しい漢字漢文教育』五十九号に掲載予定の「漢字の正誤を判断する観点（二）」をお読みいただきたい。

注

（1）『大書源』（二玄社　二〇〇七年）より

欧陽詢の「九成宮醴泉銘」は楷法の極則と言われる楷書の最高傑作である。

（2）原田種成編『漢字小百科辞典』（三省堂一九八九年）三二頁参照

（3）前掲注（2）『漢字小百科辞典』三二頁参照

江守賢治著『解説字体辞典』（三省堂一九八六年）三一～三五頁参照

『新華字典』の字形は、天と下の横画が長い字形になっている。